

ピアノ名曲の世界

作曲家ひとりひとりの個性が輝く

文 飯田有抄
イラスト SUNNY.FORMMART / 向井勝明

■モーツァルト:ピアノ・ソナタ第11番 「トルコ行進曲付き」から第2、3楽章

モーツァルトが作曲したピアノ・ソナタ第11番は、3つの楽章で成り立っていますが、今日は優雅なメヌエットの第2楽章と、「トルコ行進曲」と呼ばれる第3楽章を聴いてもらいます。トルコ（オスマン帝国）の軍楽隊が奏でる行進曲は、1拍目にシャーン！とシンバルを鳴らすような、とても派手な音楽です。ヨーロッパの人々はそうしたトルコ行進曲の特徴から大いに刺激を受けました。モーツァルトもそのユニークな特性をこの第3楽章に取り入れています。

■ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」

「悲愴」という言葉は、この曲の楽譜が初めて出版されたときに「悲愴的な大ソナタ」(Grande Sonate pathétique)と表紙に印刷されていたことから、タイトルのように定着しました。このソナタはベートーヴェンが27歳のときに作曲したものです。それまでに彼が作ったソナタは、先輩作曲家のハイドンやモーツァルトの影響を大いに受けたものですが、このソナタにはベートーヴェンらしい情熱的でドラマティックな表現がみられます。第1楽章は、深刻なムードの序奏や、左手の素早い動き（トレモロ）と右手の駆け上がるような音型が印象的です。第2楽章はゆったりと穏やかな音楽です。第3楽章には心に残るメロディーが現れます。

■武満 徹:雨の樹 素描

しずくが木の葉をしたたり落ちる様子がイメージされ、濡れた木の香りが漂ってきそうな、とても美しいピアノ小品です。手拍子ができるようなはっきりとしたリズムや、□ずさめるようなメロディーは登場しませんが、樹木や雨といった自然のもつ雰囲気や繊細に描き出されています。この曲は武満 徹さんが1982年に作曲しました。10年後には「雨の樹 素描Ⅱ」という曲も作っています。武満さんは河、海、雨といった、さまざまな形となる「水」からインスピレーションを得て、いくつもの作品を残しました。

■ショパン:バラード第1番

「バラード」とは、物語や伝説を歌った中世イギリスの歌を起源とした音楽です。ショパンはピアノ曲のジャンルとしてバラードを作り、4曲を残しています。第1番は何かを暗示するような序奏にはじまり、やがて3拍子のメランコリックな舞曲風のテーマが聞こえてきます。次第にテンポを上げ、感情の大きな波を迎えたかと思うと、やがて柔らかく愛情に満ちた2つ目のテーマが聞こえてきます。ショパンらしい甘さと激しさを兼ねそなえた聴きどころの多い作品です。

■ピアノと作曲家をめぐる気になるエピソード

作曲家とピアノはきってもきれない関係です。
今日演奏される曲の作曲家たちは、どのようにピアノと関わってきたのでしょうか。

文=飯田有抄 イラスト=SUNNY.FORMMART / 向井勝明



○ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~1791)

オーストリアのザルツブルクという街で生まれ、小さな頃から音楽の才能を発揮します。5歳で初めて作曲し、鍵盤楽器の演奏もとても上手で、人々から「神童」と呼ばれました。そんなモーツァルトが6歳のとき、オーストリアの王様と女王様の前で初めて演奏したときのこと。小さなモーツァルトはなんと女王さまのおひざの上に飛び乗り、首に抱きついてキスをしたそうです。モーツァルトのピアノ音楽には、そんな彼の素直な茶目っ気が表れていますね。

○ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)

ベートーヴェンが生きていた時代のピアノは今よりも鍵盤の数が少なく、音の出る仕組みもずいぶんと違っていました。「新しいモノ好き」だったベートーヴェンは、ピアノメーカーに「もっとこうしたほうが良い」とアイデアを出したり、新型ピアノの音域、ペダル、強弱の変化などを思う存分使って、新しい表現に満ちたソナタを作り続けました。そんな最新鋭のベートーヴェンの音楽は、きっと当時の人々の耳をいつも驚かせたことでしょう。



○武満 徹(1930~1996)

武満 徹さんは、音楽大学などには行かずに、ほとんど自分で作曲を勉強して日本を代表する作曲家となりました。若い頃にはまだ自分のピアノを買うお金のなかった武満さんは、道を歩いていてピアノの音が聞こえてくると、その家を訪ねて「弾かせてください」と頼んでいたそうです。頼まれた家の人たちはみな親切に、若い武満さんにピアノを貸してくれました。後年美しいピアノ作品を生むこととなった武満さんの才能は、そうした日々を支えられていたのです。



○フレデリック・ショパン(1810~1849)

「ピアノの詩人」と呼ばれるほど、ピアノを通じて想いを表すことのできたショパン。ポーランドで生まれ、フランスのパリで活躍をしたショパンは、当時パリで人気のあった「プレイエル」というデリケートな音色をもったピアノをととても愛していました。恋人といっしょにマヨルカ島へと旅したときにも、プレイエルの小さなアップライト型のピアノを運び込みました。旅先での嵐の夜、そのプレイエルで名曲「雨だれのエチュード」を作曲したと言われています。

